

浄 土



今月の随想

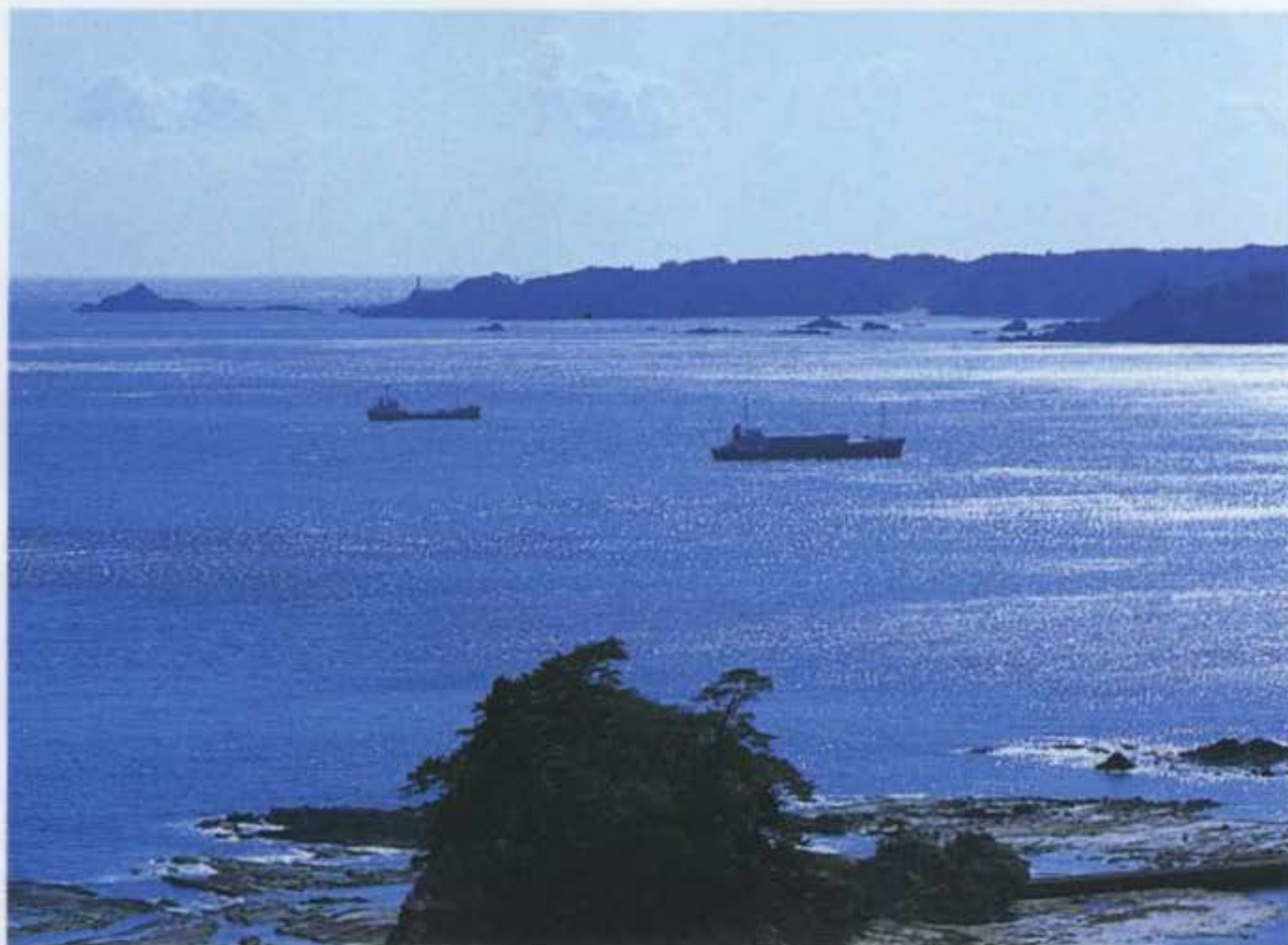
森山隆平 斎藤梅子 倉田保雄

能登、ふたつの海 夏 攸吾

念仏信仰の系譜② 須藤隆仙

新連載●TVキャスターのアンクル① 利根川 裕

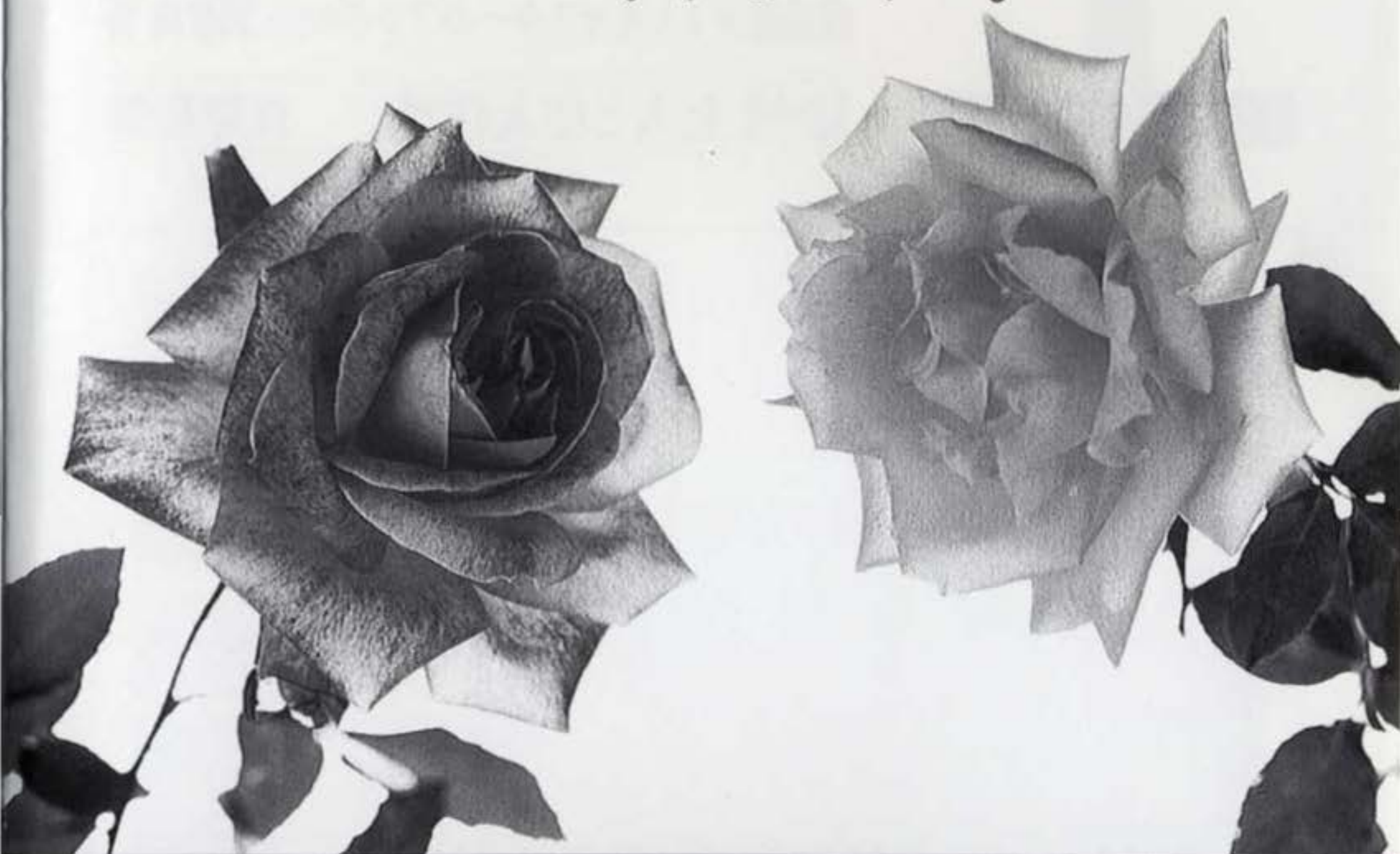
法然上人と女人往生 真野龍海



わかり合うことは、

語り合うことです。

以心伝心。古来から日本では、黙っていて
も心は通じるものといわれてきました。
でも、やっぱり話さなければわからないこ
とってありますよね。もっとお互いがわか
り合えるために。日本テレコム・0088
でゆっくりおしゃべりしてみませんか。



0088なら、もっと気軽に、もっと長〜く話せます。

- 例えば、東京(03)↔大阪(06)間なら
25.4%もおトク。
※平日夜7時に15分間電話した場合
- かけ方は、アタマに**0088**を回すだけ。
- 月々の基本料金は一切ナシ。
※NTTの基本料金は従来どおりです。
- 電話機・電話番号もそのまま使え、
ご自宅での工事もなし。

安い市外電話

0088

.....
0088のことならなんでもお気軽にお電話で。

日本テレコムお客様センター

☎**0088-82**(無料)

または、☎**0120-0088-82**(無料)

●受付時間 9:00~20:00(年中無休)

能登紀行



富山湾越しに望む立山連峰



大敷網漁、早朝の網起し

写真 夏攸吾



朝の氷見漁港



典型的な内浦の風景



獲れたての魚の水揚げ



縄文イメージのオブジェ



能都町、縄文真脇温泉浴場



社交場でもある輪島の朝市



輪島市西保海岸の“間垣”
をめぐらした家



朝市へてかける「かーか」(母)たち



門前町総持寺



富米町の増穂浦



外浦の隠れた味「岩海苔の」のり鍋

浄土

1993/8月号



目次

能登紀行——**口絵**……………写真=夏 攸吾 3

今月の随想

生きること 死のこと……………森山隆平 8

盆踊りのころ……………斎藤梅子 12

巨悪も死ねば惜しい人?……………倉田保雄 16

能登、ふたつの海……………文と写真=夏 攸吾 20

念仏信仰の系譜——**②**……………須藤隆仙 28

新連載**●**テレビキャスターのアングル——**①**

政治のテレビ現象……………利根川 裕 34

随想**●**法然上人と女人往生……………真野龍海 39

編集後記……………48

表紙撮影=落合泰三

生きる人と 死のこと



森山隆平

生まれたときから死のときが始まる。

生は表口から堂々とやってくるが、

死は裏口からそっと忍びよってくる。

わたしは今年で満七十五歳である。

赤子のころスペイン風邪がはやり多くの乳児が死んでいった。私は幸いにも生き残りの一人であるが、これがまず意識しない死との邂逅ともいうべきか。

成人したときは戦争の真只中で、初年兵として満州の東寧に出征した。いのちにかかわる華々しい戦闘こそなかったが、毎日が否も応もなく死との対決というべきであつた。

真剣に死を考えたといえは大げさであるが戦友も私も死と向きあい、死ぬのは嫌だとか死は怖いとか、死にたくないという思いをのりこえて、死は偶然ではなく必然のことと覚悟して、

内心はともかく、人前では凜として潔く振舞っていた。前戦でも銃後でもあのころの若者は事に臨んで死は当り前のことと受けとっていた。自ら意識しての死との対決であつた。やがて終戦は新京で迎えた。

幸か不幸か復員してみると学友の大半は戦死し、戦後の混乱の中へ裸一貫で放りだされたわけ、今度は生きるための苦闘が待っていた。あれから数えてざつと五十年、歳月は夢の如しであつたが、あと四、五年もすれば私もお釈迦さんや法然さんのなくなられた年、八十がやってくる。

人間である限り、この世を生きるということとは死に対しても腹をくくって日を送らねばならない。如何に生きるかということとはまた如何に死ぬかということでもある。「平生即臨終」「臨終即往生」ということばを聞いたことがある。

生きるといい、死ぬといつてもたかだか五十年、長生きしたといつても八十年そこそこである。にんげんは億劫の仏の目からみればほんの瞬時のちっぽけな存在にすぎない。

人の世はこれ旅であり、

人の子はこれまた孤独な旅人である。

ひとはこの世でざつと五十年、死ぬばあの世とやらで三十三回忌、初七日から黄泉の旅が始まる。血の池地獄・針の山・えんまや十王に裁かれ、十三仏の御慈悲でやつとこさ成仏できるまで早や三十三年の月日がかかっている。つまり昔の人の一生はこの世とあの世をあわせても八十三年がぎりぎりであつた。

ところが、今や平均寿命もだんだん八十に手が届き、昔の人があの世とこの世でなめた苦患を今の人はこの世だけで苦しむ破目となつたわけである。始めは大騒ぎし、今は馴れっこにな

り、いきつく先はどうなるやらと不安いっぱいである。病院が平成の姥捨山となり点滴と薬で徒らに長命の苦を味わっている。

新聞の死亡欄をみるとあんなに九十代の人が多かったのに、五十、六十の働き盛りの訃報が混じるようになり、昨今はそれも珍しくなくなつた。ちよつとした異変である。

幾つもの坂、幾つもの道を

人は何故急ぐのだろう

あと戻りのない人生を あのように

老人が多くなつた社会にあつて、五十前の人
の過労死や若者の交通事故死はとても悲しい。

「なにゆえにかくもお急ぎ召さるや」と、つい
溜息が洩れてくる。逆修の悲哀である。

話は変わるが、昔の人は十三で虚空蔵さんにお参りして女も一人前となり、十四でさつさとお嫁にゆき子を産んだ。男も四十二の厄がすむ

と長男に跡目を譲り隠居の準備をしたものである。この世で欲をはなれた楽隠居の存在は社会の潤活油として貴重であつたし、社会そのものも若返りして活気があつた。

現今は停年の仕組みこそあつても経済的事情からおいそれと隠退もままならず、誰も彼もあぐせく働いて老い先きの保証もなく、不安な毎日である。このままでは社会は活気を失い老化するばかりである。国家にも盛衰、寿命があるとしたら、ここら辺りでまず若返りの施策も必要でなかろうか。なかでも政財界の老害はひどすぎる。

人生五十は曲り角

まだまだ遠くに灯りがみえる

六十は粋な季節もう一度燃えてみたい

七十はこの世の締めくくり

ぼちぼち身边をととのえて……

八十、九十はそろりと参ろう

さて、時は人間にいろいろな生きかたと死にざまをあたえている。たとえば、信長は「人生五十年化転のうちを較ぶれば」と謡い、且つは舞ってあっけなく本能寺で四十九の生涯を自刃した。

捨てる宗教の一遍さんは「捨ててこそ」に徹し、遊行と賦算して念仏をすすめた。「生死の妄念を捨てなされ」と人にも説き、「屍は野に捨てて獸に施しせよ」といい残して目をつむった。年五十一の短命であつたが、遊行の日々がいのちを縮めたのであろうか。

「貪らずほどほどに」が口ぐせの良寛さんは、托鉢こそ沙門の本分と清貧に甘んじ、晩年は念仏の世界に遊び、「死ぬときは死ぬが宜しく候」と極めてあっさりしたもので、年七十四でこの世をおさらばした。

法然さんは浄土からこの世に生まれかわり、年八十で化縁尽きて浄土にかえられたが、臨終のきわには盛んな奇瑞があつたとその弟子親鸞は『高僧和讃』の中で師をしのんでいる。

煩惱具足のまま仏となつた親鸞は九十まで長生きしたが、「屍は加茂川に入れて魚に与えよ」と申されて示寂された。その臨終にはいささかの奇瑞もなく、『御伝鈔節談』の筆者は、

紫雲よりも音楽よりもまた光明よりも

南無阿弥陀仏にまさる奇瑞はなかりけり。と讃えている。親鸞の面目躍如というべきか。

さて、私たちはこの世を生きるには、少なくとも七十を一つの区切りとして、お釈迦さんや法然さんのように八十で何の未練もなくあの世へゆきたいものと願っている。

私もあと四、五年がこの世における正念場である。
(日本石仏ペンの会会長)

盆踊りのころ



斎藤梅子

大川の堤が青む頃になると、どこからか鈴の音が聞こえてくる。そして、どこへともなく消える鈴の音。白装束に手甲脚絆など、死装束に身をかためた遍路の鈴の音である。

四国八十八ヶ所を巡拝する遍路の旅は、大自らのなかで、自己を見つめ、故人の菩提を祈り、

ひたすら歩く。春季だけでなく、炎天下をゆく遍路、先を急ぐ秋遍路、四季折々の遍路のありさまは、信仰とは別に、私の原風景として今も心に生き続けている。

その頃の田舎で目に付く建物といえば、寺だった。隣村に札所寺があり、小学校へ入学する

前は寺に通った。現在教会で開かれている日曜学校のようなものである。行くと先ず長い廊下を渡って本堂へ。薄暗い本尊の前に坐ってお経を唱える。日和のよいときは藤棚の下にオルガンを持ち出し、お坊さんが弾いて歌を教えてくれた。いつのまにか仏教は子供心に浸透していったのである。

昭和初期のこと、祖母の唯一の娯^{たの}しみはご詠歌で、正御影供が近づくと水色の布で手甲や脚絆を縫い、寺詣りに出かけた。ほとんどが近郷の寺だった。何かにつけて仏の教えを口にし、「善」「悪」などを地獄とか極楽の話のなかで、私たちを論したのである。

宿がなくて困った人を泊めるのもしばしば。あるとき、むさい坊さんが来た。坊さんは風体に似ず灸術を心得ていて、近在の人に施したもののだから、逗留がひどく長引いたのを思い出し

ている。

やがて太平洋戦争。その終末に近い女学校四年生の後半を学徒勤労動員令により、親元をはなれて航空機製作に従事した。「国のために一身を捧げる」の教育が学徒の間にも徹底していた時代である。戦地といわず内地でも空爆等による死者が多く、「死」はいつも身近にあった。学徒動員に行くと死ぬからと言い、参加を拒んだ人もいたくらいだ。軍需工場、しかも航空機製作工場は標的の最たるところで、事実大空襲を受けたが、幸いにも全員無事帰郷。ほどなく終戦となった。

それから暫く経って私は結婚した。三人の子に手が掛からなくなった昭和三十七年、もともと胃が弱かった母が体調を崩した。それまでも医院に通っていたが、いつもと違う腹痛だという。優しくて辛抱強く、筋をとおす典型的な明

治生まれの気性の母に、医師の指示は絶対のもので、定められたとおり服薬していた。その律気さが取返しをつかない禍をもたらすとは思っても見なかった。

七月の末、小康状態となり、快気祝いを配ったが、再び激痛に襲われるようになった。陽気で盆の囃子は好きな筈なのに、耳について煩わしいと言ひ、早く盆が終わるといいのに、とこぼしていた。体力が衰えたのだろう。往診のたびに医師は首を傾げるばかりである。腹部の痛みは間断なく、痛み止めの注射や薬効もなく、^{あしのうへ}跖の感覚がなくなったのだ。

「入院しませんか」と医師に勧められた母は、微笑んで頷いた。医師が帰ったあと、「もうこれで終わりね」と指輪を外して掌にのせてくれるのだった。「きつと元気になるわ、大丈夫」と励ますのだが、眠りから醒めたとき、「きれいな花がい

っぱい咲いていたわ」と言う。彼岸と此岸を往来しているのではないかと胸が痛むのだった。

入院したら帰れない、といつも言っていた母。病院へ向かう車の中から何度も家を見た。いろんなことが想い出されたのだろう。眼差しは穏やかであつた。入院後もこれという処置はなく、マスカットを小さくして呑みこむのが精いつばいで、病名もわからないまま、足の痺れは腹部へ及んだのである。

目を開けては何かを訴えるが、言葉にならない。胸部まで痺れてしまったのだ。入院後二日の夜だったろうか、ベッドの上で後ろから体を支えようとすると、突如として上半身を起こしたのだ。動けない母である。ひと言、ふた言、はつきり何か言つたのだ。聞き正そうとしたが、すぐにぐったりしてしまった。とっさの出来ごとに驚き、明日は少しよくなるかも知れ

ない、と一縷の希みをかけていたのだが――。

還らぬ人となった母。言いたいことは山ほどあったに違いない。「ご臨終です」の言葉を虚ろに聞いて母の顔を見た。はっとした。眦まじりから大粒の泪なみだが滲み出たのである。何の泪だろう。

後日の学会の発表によると死因は「キノホルム」による「スモン病」であつた。薬害である。医者にかかりながら、その指示を忠実に守つたために命を縮めるなんて。あつてはならぬことだ。享年六十三歳の母の泪は、無念の一雫ではなかつたろうか。

昨秋、南山城の奈良県境に近い当尾とぐのの里に浄瑠璃寺を訪ねた。真言律宗の寺で、簡素ながら奥床しいたたずまいだ。寺域の東に三重の塔、まんなかに苑池、西側に九体の阿弥陀如来を祀る本堂が、東から西へ一直線に配置されている。春秋の中日には薬師如来を祀る塔の真後ろから

日が昇り、やがて池を照らし、西の阿弥陀如来の真後ろに日が沈む。それは東方の浄瑠璃浄土（過去の世界）から現世、そして西方の極楽浄土（未来の世界）へすべてが導かれるという教えを形でもって説いているという。その話を私は母の死と重ねながら池の畔に立って聞いた。

今年母の三十三回忌である。芝居好きだった母は彼の世ではどうしているだろうか。「死」は土に還るのだとも、「無」だとも言われるが、死後の世界があると信じたいのは、人間の心の弱さだろうか。

いつか訪れる「死」。日々の営みも生と死の間にあり、死と隣り合わせに生きているから詩歌が生まれるのだと思う。母が使っていた裏座敷に、あの頃と同じに稽古のぞめきが聞こえてくる。阿波の盆踊りも彼の世から精霊たちが戻ってくる踊りという。（俳人・俳誌「青海波」主宰）

巨悪も死ねば 惜しい人？



倉田保雄

人は死ぬとまず間違いなく「立派な人」「惜しい人」になる。少なくとも、日本のお通夜における会話、葬儀で読まれる弔辞、マスコミの追悼記事に関する限り、それが通り相場である。マスコミで「巨悪のかたまり」だと決めつけられていた政治家では、死ぬとその同じマスコミが、「何やかやと批判は浴びていたものの惜しい人を失った」などと書くことは決して珍し

くない。この点、ヨーロッパのマスコミにそうした「なにわ節的な追悼記事」が出ることはきわめて少ない。とくに政治家に限らず有名人の死で生前のライバルのコメントなどは是々非々に徹し、死んだからといって評価を変えるようなことはなく、「いずれにしても惜しい人」などという言葉は出てこないのがふつうだ。数年前、パリ訪問中にフランスの著名な政治

評論家レーモン・アロンが急死したのだが、テレビでコメントを求められると、かなり厳しい生前のアロン批評をやつてのける敵(?)が案外多いのにびっくりしたのを覚えている。

もちろん、それは単なる悪口ではなく筋道の立つた見解の相違からくる批判なので、「立派だ」とか「惜しい」などと心にもない言葉を使うよりも、スッキリしていて、私としてはむしろ好感が持てた。

社長や専務のポストを巡って激しい権力抗争があつた会社で、社長が死んだので、取敢えず専務の昇格は間違いないといわれている状況下で行なわれる社葬に出席した場合、私は昇格する専務の顔つきをよく観察することになっている。

たしかに、顔は神妙そのもので目に泪なみだ、口を開けば「残念」「惜しい」を連発するが、その分だけ心の中は笑いが止まらないに違いないから

だ。つまり、その笑いの部分が抑えても抑えても顔に出て困っているもので、こちらが笑いをこらえなければならなくなる。

私はフランス人の学校でフランス人の先生に育てられたせいにか、自己主張が強いので、敵が多いことを十分承知している。六十の大台を過ぎると、必然的に友人、知人の葬儀に参列することが多くなり、数多くの「惜しい人」弔辞を聞かされるのだが、その都度、自分の葬儀のときのことを想像してみることにしているのだ。

敵側も、嫌な野郎が消え失せたから、地獄行特急の運賃代りに香典でもやるかということとで案外、たくさんやってくるかもしれない。中には、「貧乏くさい葬式だったよ」と言いふらしたいがために、賑わいを確認のためにやつてくる手合いもいるだろう。

そして、死ぬ直前まで味方だと思っていた奴

が、控え室で私が生前に生理的嫌悪を感じていた変な奴と仲良さそうに談笑しているなんてこともきわめてあり得るだろう。

問題は惜しい人と言われるかどうかだが、生きている間は、心にもないことはお断わりだと思っているが、死んでみると自分もまた人の子で、惜しまれたい。たえ、ウソでもいいから。IIという気になるのではないか。そんなことは、死ななければわからんことだとわかっているのに、気になるとは！

私は太平洋戦争の最後の一年間を軍隊で過ごした。学徒出陣の一年後のことで、陸軍経理学校の幹部候補生だった。したがって、前線で死に直面した経験はないが、昭和二十年九月一日付けてサイゴン派遣が内定していた。

理由はフランス語が話せるからということだ

ったが、当時、サイゴンに行くこと自体、途中で船が撃沈されて死ぬ確立は九十パーセント、またたえ、サイゴンにたどりついて、ベトナム（後のベトナム）ゲリラに殺されるリスクもこれまたきわめて大というありさまで、私は死を覚悟せざるを得なかった。

そのころは、軍人でなくても、自宅にいても空襲で死んで行く人は珍しくなかったから、日本人の死生観は大きくゆがんでいたというか、死を恐れるかどうかなどは問題でなく死に対するあきらめが根づいてしまっていたのではない。かと思う。私自身、死が遠くから近づきつつあるのを知りながら、悲愴感にとらわれた記憶はない。

しかし、同時に「死んでたまるものか」という気持ちも強く働いていた。徴兵制度の恐るべき非人道性を知らないいまの若ものたちにはわ

が、控え室で私が生前に生理的嫌悪を感じていた変な奴と仲良さそうに談笑しているなんてこともきわめてあり得るだろう。

問題は惜しい人と言われるかどうかだが、生きている間は、心にもないことはお断わりだと思っているが、死んでみると自分もまた人の子で、惜しまれたい。たえ、ウソでもいいから。IIという気になるのではないか。そんなことは、死ななければわからんことだとわかっているのに、気になるとは！

私は太平洋戦争の最後の一年間を軍隊で過ごした。学徒出陣の一年後のことで、陸軍経理学校の幹部候補生だった。したがって、前線で死に直面した経験はないが、昭和二十年九月一日付けでサイゴン派遣が内定していた。

理由はフランス語が話せるからということだ

ったが、当時、サイゴンに行くこと自体、途中で船が撃沈されて死ぬ確立は九十パーセント、またたとえ、サイゴンにたどりついて、ベトナム（後のベトナム）ゲリラに殺されるリスクもこれまたきわめて大というありさまで、私は死を覚悟せざるを得なかった。

そのころは、軍人でなくても、自宅にいても空襲で死んで行く人は珍しくなかったから、日本人の死生観は大きくゆがんでいたというか、死を恐れるかどうかなどは問題でなく死に対するあきらめが根づいてしまっていたのではない。かと思う。私自身、死が遠くから近づきつつあるのを知りながら、悲愴感にとらわれた記憶はない。

しかし、同時に「死んでたまるものか」という気持ちも強く働いていた。徴兵制度の恐るべき非人道性を知らないいまの若ものたちにはわ



輪島市名舟の御神乗太鼓

能登、 ふたつの海

文と写真 夏 攸吾

すてきな漁師に逢いたくて……

「能登はマリンブルーのサウスポー」

私は^{あたし}つぶやく。地図を眺めてほしい、

いかにもみごとな左きき、ではないか。

日本海にグイと左腕をしならせる、こ

の大きな半島へ、漁師に逢いたい旅だっ

た。

銅器の高岡から富山湾沿いに、渚を縫
ってひた走る。「きときと」（獲れたて

新鮮のこと）の魚の港、ことに寒ブリで

名高い氷見^{ひみ}から、七尾^{ななお}に至る国道160

号を「能登立山シーサイドライン」と呼

ぶ。天気さえよければ、海越しに立山連

峰の眺め、ほしいまま。

能登半島に抱かれる富山湾は、浅海か

ら深海までさまざまな魚種に恵まれる豊

氷見漁港、
新鮮な魚は匂わない



穰の海である。これに匹敵する海は伊豆半島に抱かれる駿河湾。獲れる魚の持ち味はそれぞれ、だが切れのよさではサウスポーの能登、富山湾のほうに分があるように思う。

いう「生臭い」のは、古くなった魚である。新鮮な魚は匂わない、きれいな海の水が生臭くないように。魚好きは新鮮な魚を食う。

能登半島の、富山湾を抱く側を「内浦」と呼ぶ。海の波おだやかな内浦らしさは



七尾を過ぎ、湾内湾というべき七尾湾に能登島を浮かべるあたりから。数知れない小さな入江が続き、ときにそれは陸にまで入り込んで水田との境さえ曖昧な風景となる。

宇出津をめざす途中、穴水のあたりに見る奇妙な海の櫓は、かつて、火星人の存在を主張した想像力の天文学者、パーシヴァル・ローエルが「怪鳥ロックの巢」と称した「ぼら待ち櫓」。内浦の海はいつも「大敷網」という魚待ちの定置網漁で知られる。

日本の海の、漁の、魚の話をしよう。消費者は海を知らずに魚を食い、漁師は資源の枯渇に脅えながらヤケクソになって獲りまくり、国は海を滅ぼすつもりらしい。もちっとましに、もちっと賢く、

もちっとやさしく、なれないものか。養殖だのなんだのいう前に、小魚まで根こそぎ一網打尽に獲って、値よく売れるもの以外は捨てちまう、乱暴な漁法を見なおすことから始めたい……。

そんなとき、一冊の本に、一人のすてき漁師を見つけた。足立倫行著『日本海のイカ』（情報センター出版局）。水産物のなかでも、ずばぬけて日本人に偏愛されるイカの真実を、南から北まで日本海のイカ漁見聞をとおして綴ったルポである。そのなかに、「乾電池を海に捨てない漁師」と書かれた男。

エスカレートするイカ漁。かつては美しかった漁火が、現在は遠目をも暗ませるばかりの凄まじい光量である。高性能の自動イカ釣り機には疑似針と疑似針の



間にペン型ライトの仕掛けがあり、乾電池を使う。

それを取り替えるとき、この老漁師は「当然のように古い電池をポケットにしまい込んだ」という、「家に持ち帰ってゴミの分別収集の日にだす」のだと。こんな誠実な漁師は、残念ながら珍しい。

漁師の多くは人間味あふれる人々だが、ゴミでもなんでも平気で海に捨てる神経には閉口する。海に生き、海に生かされる者に、あるまじきことだ。ヤケクソとしか思えない。

私は、この老漁師にぜひ逢いたかった。著者もいう、「現代に生きる人間としての見識を持った人」に、「本当に規制できらるなら何年か漁師が泣いてもかまわんと思つとる」といい、「単に釣りが好き」という「灰色の瞳の哲学者」、ヤケクソでない人に……。

そこは能都町、「縄文の里」。宇出津は古くから知られた内浦屈指の良港である。海を見おろす遺跡の丘。近ごろ各地にはやりの温泉保養施設、縄文真脇温泉浴場の露天風呂に汗を流して、出逢いに備

えた。

新鮮で美しい能登の魚たち

ところが、ああ、なんてこった……。

訪ねた家に老漁師の姿はなく、仏壇の遺影に手を合わせることになろうとは。

亡くなって、もう六年になるという。

迂闊にも私は本の奥付を見ず、その人の名で電話番号を調べることができたので、健在を疑いもしなかったのである。

「あれから、まもなくでした。朝いつものように漁から帰って、歯医者さんに行くからってでかけて、そこで急に心臓麻痺です。私も家族のだけれも、間に合いませんでした。」

いつも港に老漁師の帰りを迎えた未亡人の言葉が、虚ろに胸に響くばかり。

星の降る里、柳田村



私は茫然と、内浦の海をあとにした……。

先端の緑剛崎^{ろっこうざき}へはまわらず、宇出津か

ら半島を横ぎって山越え、気分の切り替

え。現代の輪島塗につながるかつての“漆

ロード”は途中、奥能登でただひとつ海

のない山村、星の降る里、柳田村を通る。

御陣乗太鼓^{ごじんじよ}の曾々木で出逢う、外浦。

内浦の海とは異質の、波騒ぐ日本海。強い潮風に頬をなぶらせ、少し気分がおさまる。

朝市の輪島、厳冬の能登金剛に舞う波の花など、さまざまにいわれる外浦の魅力。私なら、西保^{にしほ}の険しく厳しく、魂を吸いこまれそうに純な海の表情を、第一に推す。外浦に卓越する風よけの、間垣^{まがき}めぐらす家のたたずまい、よそでは風化しつつある情景がこのあたりではまだ生

きている。男の体内に深く潜む、アウトサイダー気分にも似合う。

総持寺祖院で知られる門前町に、私の

波の花の舞う、外
浦の海



好きな宿がある。ビュー・サンセット。鄙にはまれな、しやれた別荘風リゾートホテル。高台から眺める外浦の夕景が佳い。

海藻の話をしよう。カジメ、クロモ、岩ノリ。いずれも外浦の波に育まれる名産。昆布の仲間でもヨードたっぷりのカジメは煮物にしてよく、モズクに似て粘り気のあるクロモは酢の物や汁にいい。能登独特の魚醤イシルの風味が食欲をそそる、岩ノリの「のり鍋」は隠れたシンブル・イズ・ベストの傑作だ。

さて、外浦にもひとり逢いたい漁師がいた。

私は仕事から取材ノートが財産である。そのもとになるのが、「ねた帖」と呼んでいるメモ。『生命と食文化』のテーマ



を主に、できるかぎりアンテナを張りめぐらし、琴線にふれた情報を書きとめておく。地域別、テーマ別に整理して持ち歩く。

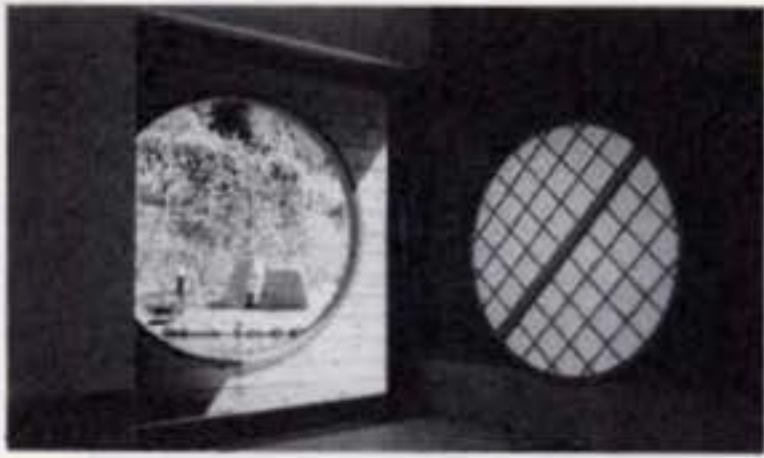
三十六歌仙貝の増穂浦ますはがうらで知られる富来とぎ町の川辺茂さん。この人のことも、もちろん「ねた帖」に書きとめてあった。『魚は人間の手では作れない』（樹心社）と

いう著書があること。だれよりも魚の鮮度を知る漁師が、新鮮な魚のうまさをものまに「鮮魚の宅配便」を手掛ける、とも記してある。

川辺さんは十年前まで地元西海漁協さいかいの組合長を務め、「金にはかえられない恵みの海を子孫に守り伝える」沿岸漁民、良心の立場から能登原発反対運動を進めてきた。

みずから「ただ儲けるためにのみ魚を殺してきた」反省にたち、「海は、漁は、魚はだれのものか」を問い直し、「生産者も含む消費者のもの」との結論に導かれて始めた「鮮魚の宅配便」という。

この人の魚をぜひ食べてみたい。できれば、漁に同行させてもらいたかった。しかし、なんという悪戯いたずらなめぐりあわ



せか、不意の急報を受けた私は、ついにこのたびは川辺さんにも逢うことかなわず、「宅配」お願いして帰京することになったのである。

悔しい……が、こんなこともある。

後日、「これから送ります、明日の午後、早くには着くでしょう」と電話があった。大海原を相手にするせいか、漁師には闊達な声の大きい人が多い。光り輝く夏の海、リズムミカルな潮騒を想わせる。

この電話は、旬の魚を獲れたときに送る、新鮮な魚をおいしく食べてもらうための、ルールだという。漁種を知らせ、食べ方までアドバイスしてくれる。

翌日、間違いなく届いたクール便の、荷をほだいて私は感動した。天然ハマチ、真鯛、太刀魚、赤イカ、飛魚に小鰹。と

びきりの鮮度はいうまでもない魚たちが、ビニール袋に入った氷枕の上にきれいに並べられ、浜料理の解説書を添えて、誠実なところがこめられていたからである。

おしまい、鮮度を送る話をしよう。

新鮮を買うことはできても、それを間違えなく届けてもらうことはむずかしい。送る側の感度によるからだ。生鮮魚の鮮度が、流通ルートをたどるにつれて落ちていくように、新鮮への愛着も薄れていく。私ら消費者はいま、まずその原点に立つ漁師さんを支援することから、はじめるべきだろう。

私は、こんどこそ川辺さんに逢う、そしてもう一度、能登の海と魚の話をしようと思う。

連載②

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

釈尊のご生涯Ⅱ承前

前述のように、釈尊はお生まれになっ
てわずか七日で母を亡くされたのでありま
す。国王の子として生まれても、世の無常
の風は、

どのような人にも万遍なく吹きつける
のであります。

父浄飯王じやうはんもどんなにか悲しまれたこと
でしょう。やがて浄飯王は、摩耶夫人まやにんの妹マハー
プラジャヤーパティ（摩訶波闍波提まかはじやはだい）を後妃

に迎え、釈尊を養育させたのでした。この女性は一説に別名ゴータミー（橋曇弥^{きょうどんみ}）だともいい（異説もある）、『増鏡』に「け、う、と、む、み、の釈迦仏養い奉りけん……」とあるのは、それでありまゝ。

釈尊はシッダールタ（悉達多^{しつだつた}）と名づけられました。へ目的を達成させるゝという意味の名ですから、浄飯王が父として子に期待する気持ちがよく表れているわけでありまゝ。ために悉多太子^{しつた}とも申し上げるのです。

釈尊の家の姓はゴータマといい、漢字では瞿曇^{くどん}と音写しております。へ最良の牛ゝという意味でありまして、インドでは牛を聖獣としているわけでした、これは大変に誇り高い姓なのでした。インドではまた甘蔗王^{かんしよ}（イク

シュヴァーク）という伝説上の王の話があつて、大変な聖王だったとされ、釈迦族もこの聖王を祖とするといわれていたのでした。それはまた太陽の子孫であるともされていたのです。釈迦族が何人種であつたかについてはさまざまな学説がありますが、アーリア人とする説が強いのです。アーリア人について『広辞苑』は、インド＝ヨーロッパ語族の人々の総称で、とくにインド＝イラン語派に属する人が自らをアーリアと称したとし、そのアーリアはサンスクリットのアーリヤへ高貴の意からきていると説明しています。とにかく釈迦族は素質もよく、誇り高い民族だったようですが、人間の幸・不幸は、そういうこととは関係なく訪れるものなのです。

釈迦族の王子として生まれた釈尊は、このようにして、生まれてすぐ片親だけの子という不幸を背負込んでしまったのであります。

前に記しましたように、仏教はこの事実から出発するのであります。そのことを以下順次に述べます。

学者さんの研究によりますと、子供の頃の釈尊は体があまり丈夫でなかったらしいというのであります。いわゆる蒲柳の質でありまして、とくに胃腸などの消化器が普通の人より弱かったらしいといわれております。そういえば釈尊はのちに御中^{おなか}(腹)をこわされて亡くなるのであります。よく病氣もされ、医者の治療を受けたようでありますし、晩年には背の痛みも訴えられたそうであります。です

から、釈尊の伝記として伝えられているもの（仏伝という）に、お若い頃、青年たちと武技を競われたとあるのは、伝説にすぎないだろうともいわれているのであります（水野弘元『釈尊の生涯』）。

こういった釈尊の実像というものを学ばせていただきますと、お釈迦様というものが雲の上の存在ではなく、私たちと非常に間近なところにおられる方としての実感がわくのであります。同時に、そこところから、お念仏の本質といったようなものを感じとらせて頂けるのであります。それはお念仏というものは前に述べましたように、凡夫が仏様に救われるためのものであるということでありまして、あくまでも凡夫という立場の人間のも

のである。立派な人間には別になくともよいものでありましょう。その凡夫というのは、梵語プリタグジャナの漢訳で、凡庸な士夫（人）の意であり、道理を知らない愚か者をいうのですが、しかし私は、凡夫とは単にそのような精神的な愚者だけをいうのではなしに、「弱い人間」「何もできない人間」にもいうのだと理解しているのであります。そういうと学者さんから、そんな意味はないと叱られるかもしれませんが、法然上人や親鸞聖人は、凡夫というものを、このようにまで広げて解釈なされたのではないでしうか。法然上人におかれては「難行苦行してこそ仏にはなるべきにて候に、五濁の凡夫、わがちからにては願行そなわる事かないがたく」（『往生浄土

用心』と仰せられ、親鸞聖人もまた「いずれの行もおよびがたき身なれば」（『歎異抄』）と言っておられる、それらは心身共に劣弱な人間を言っておられるのでありましょう。凡夫にはまた「ふつうの人」という意味もあるわけですが、ふつうの人とは、病氣もすれば、どこかに劣ったところもある、スーパーマンのような人は「ふつうの人」ではないわけでありす。

このように考えてみますと、釈尊のご生涯というものには、生まれながらにして仏教がある、生まれながらにしてお念仏がある、ある、生まれながらにしてお念仏がある、あるというのはその芽生えがあるということでありすが、そのように理解されてくるのであります、私はここのが非常にあり

がたいところだと愚考しているのでござい
ます。

実の母親がなく、しかも虚弱だった少年
釈尊は、どうしても沈うつな少年に育って
いったようです。こういうところなども、
私たちが普通の人間とまったく変わらない
わけであり、さすが、前出の水野博士の『
釈尊の生涯』に、そのことが次のように
記述されております。

若いころから、虚弱な体質のせい
か、いずれかと言えば、沈黙想を好む
性格であり、ある考えが浮かぶと、
それを解決し終わるまで徹底的に
追求しなければすまなかった。
したがって（中略）思い沈む
ことが多かったであろう。また
生母がいなかったということも、
沈みがちな王子の性

格を助長したであろう。

釈尊の苦悩

このように沈うつな少年に育った釈尊を父
浄飯王は非常に心配され、どうしたら少
しでも朗らかな人間になるかと考え、
早く結婚させたらいいかもしれないとい
うことになったようです。そのために
釈尊は若くして妃を迎えることにな
るのですが、それは一説に十六歳
の時だったともいわれ、十八歳や
二十歳説もあります。

若妻はコーリ族の王の娘で（異説あり）、
ヤシヨードラー（耶輸陀羅^{やしゆだら}）
という美人だったとされており
ますが、種々の仏伝の中には、
釈尊には妻が三人おって、耶輸陀羅
はその中

の一人だったとするものもあり、また、浄飯王は若き釈尊のために三時殿というものを建て、そこに多くの美女をはべらせて、歌舞音曲でにぎやかにした、との伝えもあるから、その結婚生活というものは今日の日本で考えるようなものとは、かなりかけ離れたものであったと考えられるのであります。当時のインドの王族での話ですから、当然のことだったのでしょう。

釈尊はのちに出家されるわけですが、私は、この釈尊の結婚生活というものにも、出家される十分な理由があったと拝察しているのであります。幾人もの妻、多数の美女、そういった中に身をおく多感な青年、しかも青年は生まれてすぐに母親と死別していると

いうのですから、そこに並大抵ではない苦悩がつきまわっていた、そう考えてよいと思うのです。ここに釈尊が出家される理由は十分にあったと思われるのであります。

しかも、その理由というのは、右のようにまったく凡俗な苦悩である。ふつうの人間が皆もっているような苦悩である。人間としての男女の在り方、生命の無常、といったような万人共通の根源的な苦悩が釈尊にもあったわけでありまして、それは当然といえどももちろんそうなのですが、釈尊の苦悩が、現在のこの私たちの苦悩と根源的に同一であるというところに、仏教の重大な意味がある、お念仏の重大な意味がある、と愚考されるのであります。

(函館・稱名寺住職)

政治のテレビ現象

利根川 裕

さきごろの政変で、これまでにはない現象があった。そしてこれは、たんなる偶然ということではなく、善きにつけ悪きにつけ新しい時代を象徴するものだったと思われる。

それは、政治とテレビの関係である。

代表的な事例を、まず三つあげてみる。一つは、宮沢喜一前首相のテレビ発言。これは民放テレビの「総理と語る」で起きたことであるが、そこで宮沢氏は、「政治改革のひとつとして、

小選挙区制を断じてやりとげます。これは必ず成立します。わたしが成立させます。わたしはウソはつきません」といった。

ところで、それから程なくしてその小選挙区制をめぐって、自民党は分裂し、法案は国会で否決され、加えて宮沢内閣は崩壊して総選挙となった。「ウソつき解散」という言葉が生まれ、宮沢氏はとんでもない「ウソつき」ということになった。

ここで、いくつかの問題がある。宮沢氏はテレビで「ウソはつきません」といったとき、たしかにウソをつく気はなかった。法案は成立すると、そのときは確信していたのである。ところが自民党の内部事情が急転し、結果としては宮沢氏を「ウソつき」にしてしまった。宮沢氏を「ウソつき」にしたのは宮沢氏自身ではなく、反宮沢の自民党一派であった。

が、テレビでの宮沢発言がクローズアップされ、「ウソつき宮沢」が一種の世論にまでなってしまったことに、テレビというものの恐ろしさがある。

推測するに、当の宮沢氏からすれば、これとはんでもないことであつたろう。国会での発言ではなく、たかがテレビでの発言が、政治的生命を奪うことになるなどは、ご本人は考えも

しなかったであろう。しかし、結果としては「ウソつき宮沢」という社会現象が起きてしまった。いうならば、聡明であるはずの宮沢氏は、現代社会におけるテレビ現象については、あまり敏感な意識を持っていなかったのである。

第二のケース。いよいよ総選挙となったとき、「自民党の一党支配」がひとつの合言葉となった。これはこれで国民的要請でなかったわけではない。そして各野党はこのスローガンのもとに、たがいに寄り合うことで選挙に勝つ戦略をうちたてた。そのころ、民放のテレビ番組で、自民党を割って新生党党首となった羽田氏と、社会党書記長の赤松氏が同座した。そのとき、赤松氏は満面に笑みをたたえて、自分からすすんで、いかにも親しそうに羽田氏に握手したのである。それがテレビ画面に映された。世間で

は、新生党の実力者は小沢一郎氏であると思っているし、その小沢氏こそ、かつての自民党支配の中核にいた人物であり、ついさぎごろまでの社会党は、小沢氏がいくつかのスキヤンダルに関係しているから、国会で証人喚問して徹底的に糾弾しなければならぬ、といったはずである。そういう新生党と社会党とが、急に仲良く抱き合わんばかりに握手するとは何事であるか。しかも赤松書記長はそのテレビ番組で、「来たるべき反自民連合の政権の首班は、羽田氏でもいい」と発言した。これでは社会党のスジが通らないではないか。社会党はいったい何を考えているのか。テレビ画面を見ていた人は、ここで驚きあきれたのである。事情通に言わせると、社会党の惨敗はここに始まった、とのこと。

しかもその後、反自民の各党党首が「自民党

政権打倒」のもとにあい集って手を握り合ったとき、テレビ画面では、ひときわ、はしゃいでいる山花社会党委員長の姿を映しだしていた。社会党に心を寄せていた有権者たちは、この映像の一コマで、すっかり気持ち冷えたはずである。そして人びとはこれを「野合」とみた。

好意的に推測すれば、山花委員長にしても赤松書記長にしても、ひょっとしたら政権の座にありつけるかもしれないと浮き足だつて、党是も忘れて媚びを売ったわけでもなかろう。が、少なくともテレビ画面では、そうとられても仕方のない表情と行為をしたのである。そして、一般の国民としては、テレビに映しだされるもので、彼らを判断しているのである。ここにテレビの恐ろしさがある。そして、この社会党首脳の二人は、そういうテレビ現象については、

やはり鋭敏な意識を持つてはいなかったのである。

アメリカは、政治とテレビの関係については先進国である。かつてニクソンは大統領選を戦うに当たって、ともすれば悪役にみえる自分の顔かたちを、整形手術で手直ししてテレビの前に立った。またケネディが僅差で大統領選に勝ったのは、彼のテレビ映りのよさであつた。レーガンは一種の国民的人気を維持していたが、彼がいかにテレビ効果に腐心したかはよく知られている。さきのクリントンもいかにテレビイメージに全力を傾けたことであつたことか。

テレビは映像をもった情報媒体である。そこでは、映像上のイメージが決定的となる。映像イメージだけが、政治の真実ではないであろう。が、テレビを中心とした情報社会がかくも盛ん

になつた現代にあつては、テレビイメージが政治を左右する重要な要因となる。情報的で、軽薄だということを含めて、これが現代の情報社会の基本的性格なのである。

さてそこで、第三のケース。

総選挙の結果、つぎの政権が自民か非自民連合かに分かれた。この際、キャスティングボードを握るのが、細川氏の率いる日本新党と武村氏の新党さきがけであつた。そのころ、各テレビは、非自民の党首を出演させて、さまざまなかたちで、来たるべき政権のありかたを論じた。その際、細川氏はきわめてデリケートな選択をしたのである。彼は非自民党党首とおなじテレビ番組で同席するのを極力避けたのである。あるときは、テレビ局のすぐそばのホテルにいなから、スタジオ入りを嫌って、ホテルからの中

継による、ということもあつた。

非自民の各党首がテレビスタジオで一同に会して、かりに口では、「われわれは野合でない」と言いつのつても、テレビ視聴者は感覚的にはそうは受けとらない。これがテレビである。そのとき、細川氏も同席すれば同類とみられる。だから同席しない。そして彼だけはホテルからの中継ということ、この番組に参加する。みずからを別格なものと印象づけるのである。

細川氏はテレビ現象を知っているのである。前記したどの政治家よりも、テレビ情報社会というものの特長を、鋭敏に察知しているのである。テレビの使いかたを心得ている、といつてもいい。ここに、この人の新しさがある。現代性がある。この人の政治的力両は、いまのところ未知数である。が、少なくともテレビ情報社

会という現代の政治家としての、ずば抜けたセンスがある。

テレビがオールマイティでないのは、いうまでもないことである。その功罪も、とりようによつては功が大きくもなり、罪も大きくなる。

が、さしあたって、これが政治と大衆をつなぐ開かれた媒介であることはたしかである。テレビによつて、密室の政治はだんだん成立しにくくなるであろう。これは評価したい。その反面、政治がテレビ現象を意識するあまりの演技になる危険もある。政治家のテレビタレント化ということもある。

が、とにかく、これが現代である。この現代性を無視した政治もありえないし、これを無視した政治家も生き残れない。

(作家・テレビ朝日系キヤスター)

随想

真野龍海

法然上人と 女人往生

このような題を出すと、今、たいていの方は、何故と、不審に思われるでしょう。人間往生、凡夫往生の願いの下、にょにんおうじょう女人往生は、仏教、特に浄土往生の教えでは、特別の思いを込めて使う言葉です。いわば専門用語のようなものです。女性往生でもいいわけですが、そう言ってしまうと、それならなぜ往生に女性をつけて言うのか、男性往生という言葉があるのか、女性と男性を区



別していくのか、等々疑問が出てくると思われます。男女平等の立場に立つ現代では、当然であります。ありましょう。

ところが、仏教とか、仏教を含む古代からの社会や教団は、ふたつの意味からして女性の見方が違っていたのではないかと、私は考えます。

一つはインド以来、女性には五障ありとされる事などです。恐らくは、その感情の豊かさの

故に梵天、帝釈天、魔王、転輪聖王らに、仏になることのできない五つの障害があると云われてきたのです。これはずっとわが国でも定着していることは、例えば文学作品等でもおわかりと思います。しかし、五障は男性でも同じ事です。男性に五障有り、に異議を唱える人もないでしょう。

これは仏教の本旨からしても矛盾した話です。山川草木悉く仏性あり、という平等の考えとは違っています。もともと、仏教には、いろいろの立場、八万四千の法門と言うのがあって、表現は各別でもあります。

しかし、この五障という言葉は、今でも当然のことのように一部では残って使われているかも知れないし、あるいは、意味がわからなくなっている点も残っている点もあるかも知れません。

当初から、仏教には男性の教団と女性の教団、比丘と比丘尼の教団があつたし、比丘尼は非常

にまじめであるとの記述もあるので、五障とはおかしいことですが、インド古来からの流れと結ばれ、既成の一つの見方として、言葉が残っています。

この仏となれぬ五障の女性という負い目と並んで、もう一つ、根欠の者、つまり男性機能のない者は、共にそのままでは、極楽へ往生は出来ぬという浄土教の経文があります。私は若い頃、この話を聞いて悲しく思いました。浄土とは罪深く、不完全な者こそ、救ってくれるところではないかと。

しかし、このお経が世に出て数百年経つと、仏教者たちは、思案を重ね、体験を積み、経文を変え、経文を越えて、万人救済の浄土の教えを確立していきました。それが、法然上人の師と仰ぐ中国の善導大師などであり、さらに明らかに示された法然上人であります。

さて、お経を変えたといいましたが、浄土へは、女人と根欠は往生できないという経文はや

がて、女人は男性に転換して往生するという表現に変わっていきます。しかし変わったところで、女性差別は変わらない。そうではありますが、長い年月（たぶん二、三百年前）かかって、そこまできたことは一応評価されても良いでしょう。なぜならば、経を絶対とする時代では、そのような表現が精一杯だったと思われるからです。

それでは、お浄土は女性がいなくて男性ばかりなのでしょうか。私は子供の時、観音様は母なる人、女性だと思っていました。そうではなくて、観音菩薩像は男性で、男性名詞なのです。慈母観音像を見ても、まさしく母の像なのですが、慈しみの情を示すと、そのようにならざるを得ないのでしょう。ある時、狩野芳崖の慈母観音像と、その下絵が展示されたので見に行きました。その下絵構成の数枚は、すべて女性のスケッチでありました。それはとにかくとして、仏たることの三十二の特色の一つが、馬陰めいん

蔵相ざうそうといつて、男性のシンボルが巨大であることが必須とされています。仏がそうですから、仏に準ずる菩薩方も当然男性と言うわけです。男ばかりの世界とは、砂を噛むような味気ない氣かもしれませんが、そこは、性のない世界、言わなければ、仏性の世界であります。女性がないというのではなく、男性も女性もない仏性の世界というのが適當であると私は思っています。

『法華經』の中で、龍女成仏りゆうにょじふつの記事が見えます。字句の上では、龍の女とありますが、それは、上に述べたような女性往生や成仏を問題視するような因習からの非難をかわす意味で、龍のという字を女につけたものと思われまゝ。この経文を読んだ心ある女性は、大いに勇気づけられ、自信を持ったことでしょう。

源平の戦乱時代に拔群の政治力を発揮された後白河法皇は、幼少から歌曲を愛好され、女子芸人、遊女を召されては、熱心に習われ、また、今様という今日の流行歌、俗曲の多くを収集し

て、『りょうじんひしやう梁塵秘抄』を著しておられる。長い道のりを越えて熊野神社に着かれたその夜は、自分の知れる限りの歌を夜を徹して神前仏前に奉納されたと言う。愛すべき法皇様である。その『梁塵秘抄』に、

女人に五つの障りあり、無垢の浄土はうとけれど、

蓮華し濁りに開くれば、龍女もほとけになり

しかし、法皇はみどりの黒髪が一筋ごとにつやつや光る「龍女の妙なる」節回しは、聞いても聞いても飽きる時がない、とこよなく女性の歌を愛でられていた。

『源氏物語』を書いた紫式部は、その物語では『法華経』を読んでいると考えられますから、この龍女成仏は当然理解していたでしょう。

それにしても龍女成仏とは怪しからぬといわれる向きもあるでしょうが、長く根付いた因習を除く一つの階段であつたのです。

このような事情は、もう一つの理由によると私には理解されます。それは、仏教が男性中心の教団であつた、釈尊も男性で、教団の秩序を確立し、修行を厳格にやっていたためには、いちばん乱れやすい男女の関係ということに対して、いろいろな戒を設けたりして、注意が向けられた。その結果、男子教団の中には女子はご法度ということとで、女子が遠ざけられるとか、遠ざけた戒律堅固な輪が道場として作られ、そうすることが修行の神聖さを示すことでもあつたのでしょう。『平家物語』に比叡山は、創設以来「五障の女人跡絶えて、三千の」清浄な僧侶が居る、と表現しています。

今度の戦争の後、女性と仏教というテーマがある番組で取り上げられたとき、対談者の女性には、さつそく相手の仏教学者に、女性差別というのは平等ではないと突っ込んでいた一コマがありました。

しかし、先日、東北の女人禁制の修行場で、

禁制を取り除いて開放したと、テレビで映して
いました。禁制には禁制の意味があつて、それ
は男子の行場なればこそ専心の修行が出来ると
いう生き方であろうと思います。禁制を無制限
に解けば今度は開かれた一般道場としての、そ
れなりの機能を持つことになったといえます。

女人禁制は、男性教師のよりよい条件を作る
ための手段、当然反対の状態も可能でしょう。

今日歌舞伎十八番の一つ「鳴神^{なるかみ}」は人情の機微
にふれるとみえてよく上演されます。山中、行
場に籠もる鳴神上人の雨封じの行を色仕掛けて
破ろうとやってきた雲の絶間姫^{たえまひめ}に、所化が「女
人禁制、内心女夜叉^{にんきんせい ないしんにょやしや}」と言ひ、も一人の所化が
「そうじやそうじや、この壇場に女を入れると
行法の算盤^{そろばん}が合わぬ」と応じます。ここは神聖
な修行の場で女子は美しく魅力的だが、修行破
壊の鬼だ、というのも、それを言うわけです。

しかし、お芝居は裏腹に進行し、姫の入場を許
して、ついに上人破戒、雷雨沛然、上人経巻を

引きちぎり、無念の形相すさまじく見え、雷の
太鼓の音轟く中に幕となります。危ない台詞の
やりとりの中にも仏教の言葉が巧みに混じり合
つていて、楽しい芝居です。

このような女性ですが、実は仏教の担い手は
女性でもあるのです。また、私の子供の時の話
ですが、修学旅行の時、京都の本願寺へ詣でて、
毛綱を見ました。本願寺のお堂を建てる時、大
勢の女性の信者さんたちが、自分の髪の毛を切
つて、丈夫な綱に編んで、建築材料を曳きあげ
るのに使ったという話を聞いて感心した。江戸
時代の説教聴聞の記録に残る聴聞者の数が、圧
倒的に女性が多いのに驚いた事を覚えていま
すが、女性は仏教の担い手なのです。「南無阿弥陀
仏」の教えを、お釈迦様から示してもらったの
は、韋提希夫人^{いだいけふじん}で、その事が説かれているのが
『観無量寿経』というお経です。それは「南無
阿弥陀仏」の原点です。私は、そのようなこと
から、仏教を深めたのは女性である、と言って

います。

この事は、とにかくとして、男性の仏道修行者は女人禁制の札を掲げました。修道院が男性を入れぬのと同じです。

以上のような長い長い歴史から男性を中心とする教団では、女性を入れるということは、どちらの意味においても慎重に考えなければならぬことでした。

しかし、どうも女性に障り多いという考えは現代にまで残っているようです。私の親戚に九十に近い老婆がおりました。よく口癖に、私は業婆々だから、こうやっていつまでも生きていくのだ、と言っていました。謙遜の心でそういうのであるが、障り重く業が尽きないから、未練がましく、こうやって生きているのだ、という、どちらかと言うと謙虚な心で、生かしては、なっているのはもったいないこと、死ねないのは、なお今生で苦を受くべき業が尽きないからだということです。

さて、私は昨年大学が定年になったので、自坊の分も、御恩報謝とはいかないまでも、伽藍を整備しようと考えました。まず本堂は、従来の洋風なスタイルから、寺院古来の形の屋根とし緑青風の色合いとし、壁などすべてリフォームしました。すると気になるのが、その周辺、特に傍の塀の壁面でした。

塀を新しくするなら、ユニークなものをと考えました。今日、塀は単なる壁面ではもったいない、道行く人に語りかけるもの、有意義なもの、がほしいと念願しました。

その壁の反対左に、地藏尊が奉安してあります。この安置場所は、その当時、ずいぶんどこがいいか考えたのですが、ある人が地藏様は門前、人の通る場所ではなくては駄目、と言ってくれたので、そこに決めました。すると驚くほど大勢の人が、朝に夕に通るかかって礼拝されていく、スポーツカーの若者もちょうど一方通行の道路なので、急停車してわざわざ降りて一心

に拝んでいくのです。これを見て私は考えました、仏教は街に、巷になければならない、と。

さらに、実は掲示板も特設してあるのですが、道行く人と直角の関係で、塀が道路ぎりぎりに出ているため、立ち止まって見る人が少ないのです。

道行く街の人に説法ということと、絵巻物で国宝である知恩院蔵『法然上人絵伝』の絵の事が頭に浮かびました。まず、有名な「室の津の遊女説法」の図はどうであろうかと考えたのです。この遊女説法の図は、法然上人が御年七十五歳の時、法難にあい、四国流刑に際し、兵庫県の室の津に立ち寄られたところの風景です。街頭にさらされるから、陶板画にすれば、風雨にも日光にも耐えるであろうと思いました。

それにつけても、所蔵者の知恩院の許可を得なければと、恐る恐る伺いをたてました。当局では、人通りのところでは先例がないとの事で協議の結果、当の塀をしつかりとしたものとし、

道から少し下げ、絵には適当な防護カバーをすれば、ならとして慎重に扱うようにという事で、許可を出していただけました。上記のような考えの私には非常にうれしく思いました。

最近、この種の陶板は非常に発達した由で、この後、関係者と共に信楽の工場に出かけました。山間の工場はすっかり近代化されていました。焼き上がりの色の具合等はコンピュータ操作です。登り窯ならぬ数十メートルに真横に連続した電気窯の中を、ローラーで八時間位して陶板がぐり抜けると完成という仕組みです。巨大な絵の絵付けの作業を何人かでやっています。書も見事に製板されています。確かに布や紙に描かれた美術品も、このような陶板にコピーしておく、いつまでも変わる事がなくて安心です。ただし、価格は相当な額とはなりませんが、このような保存法は魅力的に思われました。

私は、いろいろな手続きを済ませて、門前の

壁に「室の津の遊女説法」の陶板据付けを鶴首して待ちました。

梅雨晴れの日、除幕式を行ない、大勢の信者さんの合掌の中で、法然上人の絵が披露されました。表面はアクリルガラスでカバーし、夜間は前方に街路灯がありますが、さらに、照明灯を上方につけ、観賞用と用心のため明るくしておきました。

さて、法然上人が新しく念仏の法門を開かれると、伝統仏教、旧仏教のあちらこちらから非難の声が上がった。一つには従来の仏教に対して女性の問題に対しても従来の仏教になかった積極的対応を指導された事に対する誤解があった。りして、上人の念仏許すべからずという情勢が、旧仏教側を中心に強くなってしまったようです。本稿で先に述べましたように、仏教は女性問題については慎重で、時には敬して遠ざけるようなところがありました。

ところが、法然上人は女性の問題は積極的でありました。浄土とその教えからしても男女の区別は奇妙であります。それどころか、浄土に生まれるには念仏であるが、念仏を唱えるについて、妻帯した方が唱えられるというなら妻帯して念仏を申せ、しない方が唱えられるなら妻帯せずして念仏を申せ、といわれています。お弟子の親鸞上人は妻帯をして、法然上人御自身は妻帯せずに、念仏の道をまっとうされました。これは当時として画期的な事で、特に、僧は不犯という時代に、よく主張された事と思います。法然上人は幼少の頃、母と別れて比叡山に仏道修行に出られて後、母と会っておられません。いつも母上の事も心にあったと推察されます。出家者の身でありますから、母の事を云々はされないし、女性差別の問題については、經典に直接の批判は仏典の事でありますからされませんが、このお言葉でもわかるように女性差別については従来の仏教の扱いや、不完全な浄土の

経文には黙殺の態度をとっておられる。これが上人の「選択」^{せんちやく}です。法然上人は浄土宗の基礎になる「選択本願念仏集」^{せんちやくほんがんねんぶつしゅう}を著しておられますが、仏教のお経や浄土のお経の中で純粋な阿弥陀本願の念仏の教えだけ選択されたものです。その選択された経文は驚くほど少ない量ですが、見事に凡夫往生を示されています。

しかし、これをよしとしない勢力が、上人流刑の方向で押しやってしまったのであります。

その流刑地の四国に赴く前、兵庫県^{ひがし}の室の津に寄港されました。室の港には、春を鬻ぐ遊女^{ひきう}がいました。遊女は、自らの罪業の深さに、これで念仏往生できるだろうか、かねて思っていた疑いを、都から来た上人に尋ねた。上人はやさしくすべての念仏により往生できると答えたので、彼女は安心し、やがて、往生の素懷を

遂げたという。

この絵を陶板にして気がついたのであるが、船の左に、左右の手の指でなにかしごいている形をしている。どうやら右端の船の横木の上のこまのようなものの方に伸びているから、あるいはてぐすをよりあわせているのか、いずれにしても漁に關係して漁夫を描きこんでいます。漁夫、遊女へだてなく、往生するという念仏の力を讃えているようです。

拙寺のこの塀では、次は「生福寺の説法」「女人往生の説法」、それに幼少時の上人「勢至丸」の図を埋め込んでいくつもりです。そこには男女貴賤すべて往生という事で、女人往生に自ずから力の入った法然上人の姿勢を感じ、ありがたき思い、全完成を願っております。

(東京・天光院住職・芝学園理事長)

● 今月の随想執筆者の一人である斎藤梅子さんは徳島在住の俳人である。同時に市内有数の藍染め問屋の夫人でもあり、旧盆を控えて阿波踊りの浴衣作りに忙殺されるというのに、原稿は几帳面な楷書でお送りいただいた。長く桂信子さんの門に学んだが、現代俳句女流賞受賞をきっかけに大きく飛躍され、現在は自らも俳誌を主宰されている。瀬戸内寂聴師の生家は目と鼻の距離にあり、日本ペンクラブ会員としてもこれからの活動が大いに期待される。

● 利根川裕氏には、先々月号でお伝えしたとおり亀井勝一郎『大和古寺風物誌』ばりのエッセーを依頼してあったのだが、何分にも現在のキャスターの仕事が忙しすぎて取材の時間も思うようにとれず、しばらく時を待つことにした。東大美学の出身で最晩年の亀井氏の身辺に侍し、かつ文字どおり亀井氏の最後を看とった元中央公論の編集者である作家利根川裕氏には恰好の仕事になると期待したのだが、これはこれでまことに残念。しかし、とりあえずは現在の視点から「キャスターのアップル」が始まった。当分は台風の目ならぬ「浄土」誌の目のような立場になつてほしいと懇願してある。

● 巻末は真野龍海師にお願いした。古

い読者はご記憶のとおり、かつては本誌の編集に並々ならぬ情熱を傾けられたご当人である。ご自坊の塀を新装されたが、そこに法然上人の陶板レリーフを嵌められたので、それを機会にと執筆を依頼したら二つ返事でご快諾を得た。現在は芝学園理事長として多忙な毎日を送っておられる。私事で恐縮だが、同じ学園のPTA会長をしている私はそんなわけて拝眉の機会も当然ながら多いのだが、しかし、こんなに早く真野師のご登場を願おうとは思わなかった。厚く感謝の意を表する次第である。

● 浄土宗総合研究所の佐藤行信師のご努力で若手研究員の何人かが本誌の作業を手伝ってくれている。読者からの苦情の電話や執筆者への連絡、さらには発送業務に至るまですべて彼らの奉仕によって処理されている。しかし彼らの内から、いずれは「浄土」誌を支える人物が出てきてくれるに違いないのである。

● 不備を承知でする仕事ほど苦しいものはない。結果として不備が出たというなら多少は気も楽だが、不備多々の点はどうぞご容赦をと、ひたすらお詫びを申しあげる。

(編集チーフ・小川有順)

● お詫び

去る四月に法然上人讃仰会と浄土宗浄業会が合併して、新法然上人讃仰会が再組織され、現代のニーズに相応した信仰運動が展開されることとなりました。その後数カ月を経過しましたが、旧事務所大道社から新事務所明照会館への移転をはじめ、新会則による会員各位の移行手続き、それに伴う会費精算等になわぬ時間がかかり、併せて、本会の中核をなす「浄土」誌の刊行が、四月特別増大号以降遅延をいたし、会員読者各位には大変ご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。ようやく見通しがつき、準備期間として五・六月を合併にさせていただき、今後もしばらく毎月発行予定が遅れますが、事情ご賢察の上今しばらくご理解の程よろしくお願い申し上げます。(編集人・宮林昭彦)

浄土 六十巻 八月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成五年七月二十五日

発行——平成五年八月一日

編集人——宮林昭彦

発行人——牧田諦亮

印刷所——文化カラー印刷株式会社

写真植字——文化フォントタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人讃仰会

電話〇三(三三七八)六九四七

結局、 黒ラベル。



いつでも・どこでも・誰とでも……
楽しく飲める〈黒ラベル〉。



サッポロ〈生〉黒ラベル

人間のやさしさをクルマに。

すっきりが、いい。 新しいローレルと、日本。



頒価五百円

Photo: ローレル 25 ツインカムメダリスト (オプション装着車)



松方は、**こ**りゃあいいと思った。
◎ 本木は、**な**るほどと感心した。
◎ 松方・本木の**新**ローレル評判記。LAUREL 誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。 本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル 25 ツインカムメダリスト.....全長4710×全幅1720×全高1380(mm)/主な装備●RB25DE(6気筒 ツインカム・総排気量2498cc)エンジン●最高出力190PS/6400rpm(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フルレンジ電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●オープンセーフフルオートエアコン●ローレルサウンドシステム/(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とはほぼ同条件で測定したものです。
●日産自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323/札幌Tel.(011)722-8823/名古屋Tel.(052)951-8823/大阪Tel.(06)536-1123/福岡Tel.(092)451-8823.....お近くのローレル販売会社へ